

報告の背景・位置づけ

○背景・位置づけ

- ・本年4月に福島県内4市(福島市、郡山市、相馬市、伊達市)が国に対して共通の課題の解決を要望。
 【共通の課題】 ▶0.23 μ Sv/hという数値が短期的に達成すべき除染目標であるという誤解の解消
 ▶除染から復興への加速化 等
- ・これを受け国と4市で勉強会を重ね、その成果として、**除染から復興へと進んでいくために、国と4市による今後の施策の共通的な認識とする方向性**を取りまとめたもの。

○報告の柱(今後目指していく方向)

1. 個人の被ばく線量に着目した放射線防護
2. リスクコミュニケーションの充実
3. 汚染状況に応じた効果的な除染
4. 除染から復興へ

国が正しく伝えることができていなかったこと

- 政府の放射線防護の長期的目標は、「追加被ばく線量が年間1mSv以下」となること。
 除染はその手段の一つに過ぎない。

→ 年間1mSv ≠ 被ばくの限度 or 安全と危険の境界

- 0.23 μ Sv/hという数値は、安全側に立った特定の生活パターンの条件下で、「追加被ばく線量1mSv/y」を空間線量率に換算した**推計値**。

→ 0.23 μ Sv/h = 汚染状況重点調査地域を指定する際の基準

0.23 μ Sv/h ≠ 除染の目標 or 除染直後に達成すべき空間線量率の目安

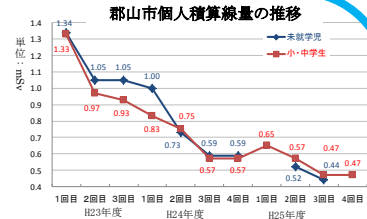
空間線量率から推定される年間被ばく線量

$$1000\mu\text{Sv/年} = \left[\begin{array}{l} \text{①計算値であり、安全を見込んでいる} \\ (0.19) \times \{ (8 \times 1) + (16 \times 0.4) \} \times 365 \text{日} \\ \text{②生活パターンにより変動する} \end{array} \right] + \begin{array}{l} \text{屋外} \\ 0.04 \mu\text{Sv/時} \\ \text{自然由来の放射線} \\ \text{時間 遅へい} \\ \text{屋内} \\ 0.23 \mu\text{Sv/時} \\ \text{地域指定の基準(空間線量)} \end{array}$$

勉強会で整理した新たな知見

I) 4市における空間線量率の現状と今後の予測

- ①除染及び物理減衰等により、**この3年で空間線量率は確実に低下**。
- ②今後除染を行う地域においても、物理減衰等により空間線量率は低減。



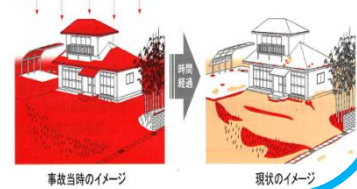
II) 個人線量関連

- ①4市における**多くの市民の年間追加被ばく線量は1mSv程度**。
- ②空間線量率が**0.3~0.6 μ Sv/h程度**の地域では、住民の**年間追加被ばく線量は平均的に1mSv程度**。
- ③「1時間当たり0.23 μ Svの地点で生活する人の年間追加被ばく線量が1mSvとなる」という仮定に基づく推計よりも、**実際の個人被ばく線量は低くなる傾向**。

III) 汚染状況の変化

- ①事故当時の面的な汚染は、物理的減衰に加え、風雨や人為活動(清掃、除雪等)により、家屋の屋根や壁では減少。
- ②一方で、雨どい下や雨落ちなど**局所に集中の傾向**。

汚染状況のイメージ例



知見を踏まえた今後の対応

(1) 個人の被ばく線量に着目した放射線防護

- 除染実施計画に基づく除染を実施した地域における、**個人線量重視の放射線防護策の充実**。
- **個人線量計を配布**して、個人の被ばく線量を把握。

個人線量計の一例



(2) リスクコミュニケーションの充実

- 以下について改めて正確かつ分かりやすく伝えるため、**リスクコミュニケーションを充実**。
 - ①除染に関する政府の方針
 - ②放射線に関する科学的知見
 - ③除染の効果や、空間線量率と個人被ばく線量の関係などの新たな知見
- 職員の除染や放射線影響等の知識の向上、行政・専門家の知見を住民に伝える人材の確保・育成。

(3) 汚染状況に応じた効果的な除染

- 線量に応じて除染作業の実施内容や作業の実施の有無を判断。
- **除染作業の重点化**により、**作業効果の向上及びスピードアップ**を図る。

(4) 除染から復興へに向けた不安解消・放射線防護策

- 住民の不安を解消し、安心した生活を取り戻すため、**(1)~(3)の対策を効果的に組み合わせた総合的な放射線防護策**を検討・推進。

